

アルパック ニュースレター



「あなたは草花を使った遊びがいくつできますか？」（本文中に関連記事があります）

アルパック ニュースレター もくじ

1993年7月1日

- 「アルパック都市デザイン・フォーラム」から…………… 2
- 田辺町 変貌する天井川 …………… 4
- 環境チェックシートをつけてみよう …………… 6
- 「景観」ばやりの中で …………… 7
- 「大学とまちづくり」の新しい動きと今後の課題 …………… 8
- 新刊旧刊書評紹介…………… 9
- まちかど……………10

NO. **60**

「アルパック都市デザイン・フォーラム」から

馬場 正哲

経済の成熟化とともに、今日の都市改造の問題は、衛生・防災不燃化、基盤整備、高度利用、住宅供給、地域活性化といった明解な目標から、都市のあり方や美しさなども含めた抽象的で総合的な対応が求められる時代とってきています。

このような今日的課題の対応として「都市デザイン」という分野がクローズアップされてきています。アルパックでも、昨年専門分野の情報発信事業として都市デザインフォーラム企画委員会を設置し、研究活動を開始してきました。

この2月23日、スペインのバルセロナでオリンピックに向けた都市計画プランニングを担当されたBusquets氏の来阪を機に、大阪大学の加藤晃規先生のコミットメントにより、都市デザインセミナーの第一弾を開催しました。その概要を紹介します。

テーマ 「都市にアートと遊びを！」

講師 加藤晃規（大阪大学工学部助教授）

Joan Busquets（バセロナ工科大学教授）

亀田裕貴（熊本県土木部建築課参事）

加藤源（日本都市総合研究所代表）

オリンピックによる都市再生

Joan Busquets（ジョアン・ブスカエツ）氏のお話は、まず都市デザインの根底は都市の再開発にあることとしている。ヨーロッパでの都市の今日の問題は都市計画と現状のギャップの問題で、これは当初の都市計画プランニングが都市の同一化など抽象的で現実から遊離し、都市の歴史や住み手の違いなどをカバーできなかったことによる。このギャップを埋める新

しい概念が都市デザインだと前置きされ、以下の内容をお話いただきました。

都市デザインで重要なことは、新しいまちに対する明るい将来ビジョンの提示で、新しい方向と具体をサポートするフィジカルプランが必要。このとき中小規模の開発が重要で、大規模事業との連携（コミュニケーション）が大切。

都市計画の土地利用計画は、必要だが絶対的力を持ち得ない。柔軟性に限界がある。まちは既に出来上がっていて必然的に変化する性質を持ち、悪い部分は改善されなければならない運命を持った共同体である。その時代のニーズに応じた形で変化していくべきで、その小さなフォローを積み重ね、小さなプロジェクトの集積によってまちは大きく変わる。

このために、専門化したものの統合化（インテグレーション）とともにインフラや都市のオープンスペースといった共通の要素を都市間に整備することが重要である。などのお話の後、バルセロナでの例を紹介していただきました。

最後に、都市デザインは、問題に密着し個性的な解決を生み出す中小規模の事業をとおり、最終的には都市の総合的なビジョンを提示できるようにすることが課題で、単なるデザインというより、むしろ恒久的な質のリサーチが求められると結ばれました。

まちおこしとしての都市デザイン

亀田氏からは「くまもとアートポリス」の紹介をいただきました。有能な建築家、デザイナーの才能とアイデアを結集して、後世

に残し得る歴史的資産を創造し、環境の質と人々の環境デザインに対する意識の向上を図る。この目的にふさわしい建物、住宅団地、橋等について、国の内外を問わず国際的に評価の高い前途有為な人材に設計を依頼し、優れたコンセプトとデザインセンスを持った、地域文化としての景観を構成する構造物を建設しようと考えている。その為に、建築家磯崎新氏をコミッショナーに起用し、それぞれのプロジェクトにふさわしい設計者を選択、推薦するシステムをとっている。

創り出される諸施設は、全県下に点在するが、これらがあたかも碁の布石のように、点から線へ、線から面へと広がっていく。「都市にデザインを、田園にアイデアを」をキャッチフレーズに、良いまち並をつくりたい、住んでいることが誇れるような熊本をつくりたいが最終目標で、建物を使っての“まちおこし”といえる。現時点では建築の世界で有名になったが、アートポリスの文化論としての全体の評価が今後の課題とのこと。

日本の現状は景観形成の取り組みが主流

加藤源氏は我国の都市デザインの現状と課題について、都市デザインの歴史と領域からお話いただき、都市空間の表層美化としての景観形成と都市空間の骨格の設計としての空間構成があるが、日本の現状は景観形成の取り組みが主流で都市デザインの広がり、奥行きが不足していること、また、日本の都市デザインのこれからの課題を事例をとおして説明されました。

1. 空間構成への積極的な取り組みが必要。基本となる道路、公園、広場、建物などの都市空間の構成をきちんと考えていく。
2. 空間構成に関する社会的な脈絡、仕組みについてのデザイナーの知識の獲得とそれに対する積極的な理解が必要。権利や経済的関

心の調整、都市デザインは調整のデザインでもある。

3. 景観形成についての原則の理解が必要。画一化の排除、やり過ぎの抑制など、デザインの原則についての知識の向上や美しいことに親しみ、デザイン・マインドを持つこと。

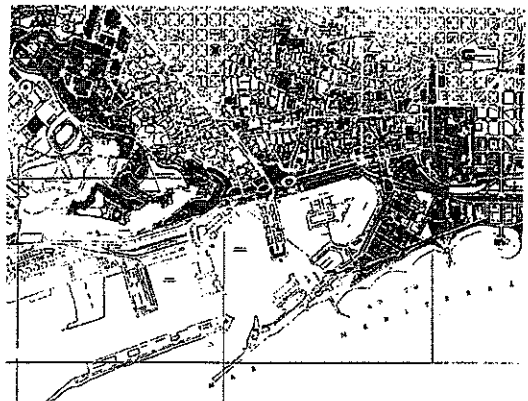
4. 社会的理解、市民の関心の向上が必要。文化には金がかかり、デザインは付加価値であるなど非経済性への理解。魅力ある都市空間、都市景観はひろく第3次産業の基盤であることの理解を深めること。

5. 都市環境のデザインに係わる多様な立場、分野の連携、協働が必要。「都市環境デザイン会議」も、多様な分野の人が集まり空間構成から景観形成までを目指して組織された。

最後にコーディネーターの加藤晃規先生が都市デザインの将来は、様々な課題があるが、ポリティカルなところを含めて強力に進めて行けば可能性があるのではないかと結ばれました。

都市計画法の改正で住民の意見を反映させた都市計画のマスタープラン作成が義務づけられるなど、都市デザインへの期待と、その真価が問われてきているように思われます。

(大阪事務所 ばば まさあき)



バルセロナ
オリンピック村とオリンピック・リング

～泰さんのあんな京都こんな京都⑭～

田辺町 変貌する天井川

山田 泰造

京都府南部の田辺町は学研都市の北の入口に当たり、同志社大学の進出や住宅団地の建設で人口が急増し、現在まさに人口が5万人を突破しようという活気に満ちた町です。町の地勢は丘陵・農地・市街地がほぼ1/3を占め均衡のとれた町ですが、山城地域特有の天井川があり(図1)、多くの問題を抱えています。今回は天井川の現況についての報告をします。

田辺町内の天井川の成因

天井川とは川床が周囲の平地の面より著しく高くなっている河川をいい、六甲山麓の河川や滋賀県草津川等各地で見られます。木津川の上流域や山城地域にはマサ土系統の山が多く、古代樹木の乱伐により山肌が荒廃して、出水があれば多量の土砂が流出します。下流で川床が上昇し、堤防の嵩上げを繰り返すことで、天井川が形成されました。更に地域内の小河川を木津川に流入させるため堤防の高さを木津川と整合させねばならず、いつしか町内小河川は民家の頭の上を流れる天井川となり、天井川の川底を道路や鉄道が通り抜ける光景が各所にみられるようになりました。

町内の天井川対策

出水による町内天井川の氾濫は内水の停滞をもたらし、木津川の氾濫による被害を倍増させたので、天井川の流域変更や河川改修・切下げが行われ、更に平常時も天井川は町内を分断し、地域間の交流・土地利用・道路交通等を阻害し町づくりの支障となるので、天井川対策が大きな課題でありました。

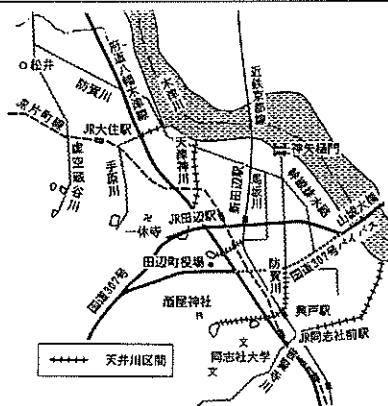


図-1 田辺町天井川現況図

田辺町の天井川の変貌

かつて天井川であった河川も含め町内の主要な7河川を踏査し、その概況をのべますと
①虚空蔵谷川 延長 3.0Km 高低差 72m
昭和7年9月堤防決壊等により松井区の下・上流各1,000mの切下げ、40年代～50年代河川改修や宅造対応の治水事業が行われた。

溜池の余水吐から流下する巾2mの小水路が起点。急勾配で団地内を通過し、丘陵部から平地部に出た河道が天井川の面影を残し、住宅や農地の中を北行し防賀川と合流。全川改修され、天井川は都市河川に変貌した。

②手原川 延長 3.1Km 高低差 100m
昭和7年9月氾濫し、下流部で川巾3倍となり橋をつけ替える。50～60年改修事業実施。

起点は山間の農業用水路。平地部に入って現川床や河道から天井川の残映が偲ばれる。

府道と交差後天井川となり木津川に流入。

③天津神川 延長 2.0Km 高低差 25m
明治17年堤防決壊し大被害発生。

起点は国道307号一休丘バス停近くの歩道

下暗渠。次いで開渠となり、平地部に出る頃天井川。府道→水路橋、片町線→マンボで通過。兩岸の広々とした野地を見下ろし木津川に流入。マンボとはこの地の老人がトンネル状の水路橋をマンボと呼んでいた。方言マブがマンボに転化したとの説あり。

④馬坂川 延長 3.0Km 高低差27m

起点の町体育館前で既に天井川となり、府道→水路橋、片町線→マンボ、近鉄→水路橋で通過。直角に左折した地点から防賀川と合流する区間が団地造成の関係で45年切下げと河道の整理が行われ、現在上流に向かって約300mの近鉄までの区間の切下げ工実施中。

⑤防賀川 延長12.3Km 高低差42m

起点は酒屋神社前。700m下流で平地部に出て天井川となる。府道→水路橋、片町線→マンボ、近鉄→水路橋で通過後直角に左折して北行。幹線排水路と合流して八幡市に向かい大谷川に合流する。神矢樋門一起点間に於いてみどりの水辺全体構想が策定され、61年樋門—国道 307号バイパス間の切下げ、63年ふるさとの川モデル事業の指定をうけ同区間の施設整備が実施中で(図2)、近く天井川は姿を消し人々に親しまれる河川公園が出現する予定。

⑥普賢寺川・遠藤川 延長 9.4Km・1.7Km

共に山間の農地部を流れ、平地部に入り府道・片町線・近鉄と交差し、天井川となり兩岸の農地を見下ろし木津川に流入。

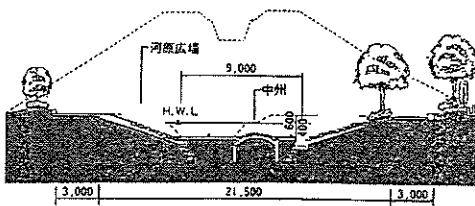


図-2 防賀川・天井川切下げ水辺整備概念図

町内天井川についての二・三の考察

①昭和47年10月防賀川水路橋復旧工事中水路橋の堤防底部に青色粘土層を発見。立命館大学谷岡武雄教授は、条理制集落の境界線として川を固定するため人工で築かれた物で天井川改修史上注目すべき資料といえると発表。

②平成元年12月防賀川切下げ工事中東鍵田で天井川底部で青色粘土層を発見。山口大学小野忠熾名誉教授は、この粘土層は条理制以降に築かれた天井川に雨水が流れ、シルトとなって底部に沈積したと推論した。

③平成3～4年度京都府埋蔵文化財研究所は防賀川改修工事等に伴い鍵田遺跡・大切遺跡の発掘調査を行い、防賀川の天井川化は近世に急速に進み、遺跡から弥生～近世の遺物が出土し各時期の集落が確認できたと発表。

④前々項①～⑤の天井川の上流端等で溜池が見られ灌漑と防災の用をなしている。

田辺町の天井川化が近世に急速に進み、やがて人々が集まり市街地を形成するに従い人々のくらしに順応する様に変貌して行く姿を見ることができました。今後も人々によりふるさとの川として親しまれ、活用されて行く事を念願する次第です。

資料 田辺町近代史

(やまだ たいぞう)



田辺町名所の1つ 三つマンボ

環境チェックシートをつけてみよう

福岡 雅子

ここ2、3年で、ごみの増加、水辺の環境悪化など、環境問題が身近な問題として様々なところで取り上げられるようになってきました。そのような動きの中で、やはり、環境についての意識啓発、それも低年齢層への環境教育の必要性がいわれています。

環境教育のツールとして、環境に影響を与える生活スタイルなどについてのチェックシート型の診断書があります。チェックシート型とは、数問～50問程度の質問に○×で答えるもので、質問内容は環境問題の知識テスト、日常生活でルールやマナーを守っているか、環境に配慮した生活をしているか、といったことです。

大阪市でも、環境への関心を高めてもらえるよう、小学生を対象にした環境チェックシートを作成し、市内の2小学校でモデル的につけてもらいました。小学生と一緒に、家族にも記入していただきました。環境チェックシートのチェック項目の一部をご紹介しますと、右欄のようなものです。

チェックシートはテストやアンケートではなく、記入結果を自分で反省したり考えを深めたりするためのものですが、試しに記入結果を集計してみると、おもしろい現象がありました。こどもたちに○が多かった質問と家族に○が多かった質問があったのです。6番、7番などはこどもたちに○が多くなっていました。

筆者は20項目中13項目しか○がつかず、環境にやさしくない生活を反省しました。皆さんはどれだけ○になるでしょうか。

(大阪事務所 ふくおか まさこ)

1. ごみやごみを燃やしてできた灰で海を埋め立てていることを知っている
2. ジュースなどの缶入りの飲み物をたくさん飲まない
3. 買い物をするとき余分な包装やビニール袋をもらわない
4. ごはんやおかずは残さずに食べ、捨ててしまわない
5. クーラーやストーブ、ヒーターをなるべく使わない
6. バス停3つ分くらいの距離は乗りものに乗らずに歩くか、自転車で行く
7. トイレで何度も水を流さない
8. 笹舟や松葉ずもうなど草花を使った遊びが5以上できる
9. 雲の色や動きなど空のようすを見て明日の天気予想がつく
10. 庭やベランダなどで植物を育てる
11. 家の近くにどんな草花があって、どんな生き物がいるかをよく知っている
12. 車や自転車の迷惑な止め方をしない
13. 公園のそうじなど、町内のみんなでやる作業に進んで参加する
14. 再生紙でできたトイレトペーパーを使っている
15. 新品ばかり買わずに中古の家具や服も利用する
16. 冬にすいかを食べるなど、旬でない食べ物を食べない
17. 象牙やワニ皮など数の少ない動物でつくった品物は持たない
18. てんぷら油や煮汁の残りなど水を汚すものを流しに流さない
19. 道にポイ捨てをした人に注意する
20. 家族みんなで環境のことを話し合う

「景観ばやり」の中で

伊坂 善明

「景観」ばやり

近年、自治体の間で、町の景観づくりのための計画や基準づくりの仕事が増えてきています。また、景観に関するシンポジウムなども各地で、数多く開催されています。「景観」という日常的には、あまり使われてこなかった言葉が、一般的に使われ始めているように感じます。

西欧の統一感のある町並み景観と比べて、乱雑であったり、個性がなかったりする日本の町並みを良くしようとする動きととらえれば、大いに歓迎したいところです。

しかし、「よそもやっているから」といった動機では困ります。

景観行政のむずかしさ

なぜなら、景観行政を進めるためには、その町なりのしっかりした考え方が必要だからです。そこに、景観行政のむずかしさがあると言えるかも知れません。

例えば、「美しい景観」「魅力的な景観」と一言で言っても、個々人によって評価が異なる場合もあります。統一した町並みが美しいと言いきれないこともあります。

また、単純に高さや建物の壁面の位置、建物の色などの規制さえすれば景観が良くなるというものでもありません。

さらに、歩道の舗装を良くするとか、街路樹を植えさえすれば、それで良いといったものでもありません。やらないに越したことはないにしても、それさえすれば「景観に配慮している」とする安易な態度が困ります。そんな状況が進めば、それこそ全国一律の「金太郎飴」の景観づくりが進む恐れがあります。その町なりの考え方が求められるところです。

マニュアルらしくない「景観マニュアル」

昨年度、ある県の「景観マニュアル」づくりのお手伝いをする機会がありました。景観づくりを「マニュアル化」して、わかりやすい手引きとして県民や市町村に使ってもらおうというわけです。すでにいくつかの県でも同種のもので出されています。

しかし、前述のようなことから考えると、機械の操作説明書のように、景観づくりをわかりやすく「マニュアル化」することができるのだろうか。あるいは、景観づくりの中で、これが「正解」といったものが決められるのだろうか。これが、我々の取り組みの出発点でした。むしろ、景観について考えるための、題材を揃え、議論を開始することが大切と考えました。実際に県内の町や建物の景観を詳しく調べて、「県内にこんな景観があったのか」とか「あそこはこうであった方がよい」とかいったことを議論することが大切なのではないか。それも、コンサルタントだけでなく、県内の建築に係わる人達を含めて。こうしたことから、地元の設計事務所協会の協力を得て、ふだん建築に関わっておられる設計士の人達に県内各地の景観の写真を数多く撮っていただきました。そして、それらについてみんなで議論を深め、その内容を冊子にまとめて「景観マニュアル」とすることとしました。また、集まった多くの写真を使って、今後各地で活用することができるようにもしました。

いろいろな事情で、議論の内容をそのまま採り入れることなどはできなかった面がありますが、結果として「マニュアルらしくないマニュアル」ができ、我々自身も景観に対する考え方を深める良い機会ともなりました。

(京都事務所 いさか よしあき)

『大学とまちづくり』の新しい動きと今後の課題
山田 克雄

大学と地域との連携によるまちづくりを進める取組が各地で始まっています。

これらの取組は、いずれも、大学がまちづくりに果たす重要性和、地域と大学との連携強化を基本としています。それぞれ地域の事情や特色を持っています。

大学移転と再配置

近年の大学移転と再配置の動きは、新設を含めて、いくつかの要因があげられます。まず、大都市での大学立地抑制政策があり、大都市の郊外立地が促されたことがあります。また、私学助成とリンクした入学定員の水まし抑制は、私立大学の施設改善を促し、新しいキャンパス整備が進められる一因となりました。

大学進学状況の変化

大学移転と再配置を促した大きな要因として、第2次ベビーブームによる進学相当年齢である18歳人口の急増があげられます。進学希望者の増大に対応して、受け皿として大学移転と再配置が進められました。

大学立地による地域の活性化

大学移転と再配置は、以上のような背景とともに、地域の活性化を目的として積極的に誘致を進めてきた地方公共団体の取組と支援が大きな推進力となっています。大学誘致にあたっては、高等教育就学機会の拡大、地域を担う人づくり、地域産業の振興、消費面における経済寄与、地域文化の向上などの波及効果が期待されるところです。

大学とまちづくりの新しい動き

現在、多数の大学が集まっている京都市、西宮市、八王子市などの都市とともに、大学立地が進んでいる滋賀県南部（大津市・草津市）などの地域において、大学が立地し、若者が存在することによるまちの活性化とともに、より積極的に大学が保有している教育研究機能を、まちづくりに生かしていく取組が行われています。生涯学習や、社会人を対象とするリカレント・リフレッシュ教育など、いわゆる開かれた大学への取組が、大学と地域との協力により進められています。また、個性ある地域づくりを進めるうえで、地域そのものを研究対象とする地域学への取組もみられます。

大学とまちづくりの今後の課題

地域に大学が存在することにより、様々な効果が期待されます。しかし、大学と地域との連携によるまちづくりは、いずれもまだ緒についた段階にあるとはいえ、相互が協議し、問題を話し合うところから始めている現状があります。今後は、大学とまちがたがいに貢献し発展するため、ソフト・ハードの条件整備を進めるとともに、大学とまちとの望ましい相互関係を築きあげていくことが「大学まち」のあり方として求められています。

(京都事務所 やまだ かつお)

編集局より
○前号(59号)の3ページ上の写真の左右が逆、右下のキャプションが間違っていました(正しくは「全景」です)。訂正とお詫びを申し上げます。

新刊旧刊書評紹介

サラ・パレツキー著 ハヤカワ文庫

バーニング・シーズン／BURN MARKS 紹介 馬詰 建

主人公はV. I. ウォーショースキー。このままだとファースト・ネームがわからないので、男か女か判断できないが、それがこのシカゴの女探偵の意図するところでもある。初対面の相手には仕事の依頼者であっても、ファースト・ネームは明らかにせず、V. I. ウォーショースキーで通している。

私がいわゆる探偵小説を読む理由の1つは探偵の住む国や都市の社会情勢などが良くわかる点である。それは探偵小説が犯罪を主題とするために、その国や都市の抱える罪悪や社会問題をテーマとしていることが多いからだ。

たとえばこの「BURN MARKS」にはSROと呼ばれるホテルがでてくる。これはSingle Room Occupancyの略で、「SROホテルというのはもともとシングル用ホテルって意味なのよ。シングルというのは同居人を一切おいてはいけないってこと。……赤ちゃんなんてもってのほか……」ということらしい。一般的には高齢者・浮浪者のためのホテルで、部屋は「狭いベッド」があるものの「66歳になって、服をしまう3つの引き出しがあるだけの小さな部屋で暮らす」ためのものである。この小説にてでてくるV. I. の伯母エレナは月75ドルで契約していた（本作品はアメリカで1990年に出版されている）。

アメリカではジェントリフィケーション（中産階級による民間借家等の購入及び改善行動）などによりこれらのSROが取り壊され、ホームレスが増加している。V. I. が緊急住宅局において「あらゆる年齢の子供をつれた女たち、1人で何かつぶやきながらぎょ

ろりと目をむく老人たち……人々の列が果てしなく続いている」なかで伯母エレナのために住宅を捜す様子が描かれている。そ



してこの伯母の住むSROが放火により焼失する始まりこそが、それらを駆逐する再開発とそれによって増加するホームレスなど、レーガン政権以降のアメリカの住宅事情を象徴する例である。最近よく紹介されるアメリカのCDC（Community-based Development Corporation）は、これらのSROを保存・修復するための活動も積極的に展開してきている。

探偵小説を読むもう1つの理由は、単にこれらの探偵の生き方、ライフスタイルに憧れるのである。ここでもV. I. は、再開発にからんだスキャンダルを恐れる政治家から様々な妨害を受け、生命の危険にさらされる。それでもなお調査を続けるのはすさまじいまでのプロ意識であると思う。

彼女（彼）らは単なる正義感のために命懸けで調査を貫徹するのではなく、依頼者の要求を満たし、調査料を獲得するために、徹底的に遂行するのである（ただし本作品では特定の依頼者が存在せず、肉親が絡んでいるため、特殊なケースであるとしておこう）。

Paretskyの最新作のテーマは老人問題だそうで、ついでにV. I. のファースト・ネームを知りたい人は次作からどうぞ。

（大阪事務所 うまつめ たけし）

ま ち か ど

お花畑のワイルドフラワー化？

中村 孝子

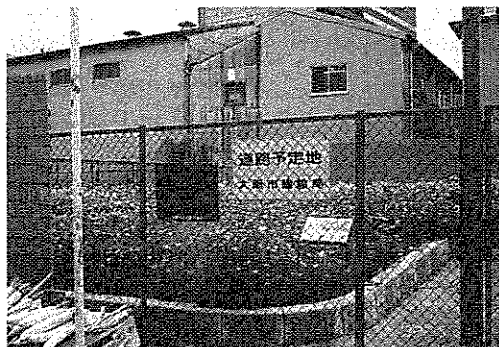
大阪事務所のあるOBP（大阪ビジネスパーク）では、ケヤキ並木と緑豊かな公開空地が、四季折々の風景を演出しています。その側の商店街の一角に、小さなお花畑を発見しました。

お花畑は、大阪市の都市計画道路予定地で、道路建設までの空地の利用としてボランティアで植えられたワイルドフラワーが育っています。ワイルドフラワーとは、直訳すれば野

花のことですが、最近では野草的雰囲気をもつ草花の植栽について名づけられています。遊休地以外でも、堤防、河川敷などに野生的な草花の種子をブレンドして蒔くことにより環境緑化が図られています。

ここには季節の移り変わりと共に草丈の高低、色彩、開花時期の違いなどが美しさを表現するようにカスミ草、ポピーなど数十種類の種子が蒔かれています。平成2年9月に種子が蒔かれて2年半。現在は淘汰されてか、マーガレットが群生しています。文字どおりワイルドフラワー化しています。

（大阪事務所 なかむら たかこ）



アルパック (株)地域計画建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本社	〒600 京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82 (大和銀行京都ビル6階)	TEL (075)221-5132(代) FAX (075)256-1764
京都事務所	〒540 大阪府中央区城見1-4-70 (住友生命OBPプラザビル15階)	TEL (06)942-5732(代) FAX (06)941-7478
大阪事務所	〒460 名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 (ツボウチビル2階)	TEL (052)962-1224(代) FAX (052)962-1225
名古屋事務所	〒160 東京都新宿区新宿2-5-16 (露ビル401号)	TEL (03)3226-9130(代) FAX (03)3226-9560
東京事務所	〒810 福岡市中央区天神1丁目15番1号 (日之出ビル6階)	TEL (092)731-7671(代) FAX (092)731-7673
(株)九州地域計画研究所	〒540 大阪府中央区城見1-4-70 (住友生命OBPプラザビル15階)	TEL (06)965-2012(代) FAX (06)965-2014
(株)アルパックインターナショナル	〒604 京都市中京区東洞院通六角上ル 三文字町225 (朝陽ビル4階)	TEL (075)252-2231 FAX (075)252-4417
(株)都市居住文化研究所		